

国立病院機構八雲病院の 閉鎖・移転計画問題で集会



昨年12月1日、国立病院に求められる障害者医療の充実をテーマに、八雲病院の機能移転と廃止問題を考える集会が札幌市内で開かれました。

国立病院機構八雲病院は、筋ジストロフィー患者と重度心身障害患者が療養しています。国立病院機構は、2015年、医師不足などを理由に八雲病院を閉鎖し、患者を札幌や函館の病院へ移転することを公表しました。これに対して、患者の家族は「意見を聞かれたとはない」「個別の説明はなかった」と機構側の一方的なやり方に不満が広がりました。

患者家族が切実な訴え

八雲病院の入院患者は現在も2000人を超え、八雲に障害者医療機能を残さないことへの強い反発や移転先での医療の継続性への不安が相次いでいます。

息子さんが筋ジストロフィーで療養する小林石男さんは「八雲は患者家族にとって生活そ



のもの。小さくても八雲に機能を残してほしい」と訴えました。

また、お姉さんが重心病棟で療養する高木ひとみさんは「移転先はガラス張りの八雲病院と違って、部屋が壁で区切られている。看護師が患者の異変に気付けるのか」と不安を訴えました。

重度障害患者を245キロ移送に懸念

昨年11月26日付で機構が示した「患者移送計画」案は、2020年8月18日から、わずか4日間で帯広への3人以外の患者を移送するという強行日程です。

八雲病院の看護師は「24時間人工呼吸器が必要な患者が9割」といいます。札幌に245キロを4時間かけて移送するとは思いますが、緊急支援病院として指定されるのは、札幌市までは伊達赤十字病院と千歳市民病院の2カ所だけです。命にかかわる異変があっても対応できるかどうか疑問です。